ドライブ

ミナクア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ドライブ

【Ｎコード】
Ｎ８８２１Ｆ

【作者名】
ミナクア

【あらすじ】
ホラーです。なんとなくドライブにでた大学生の主人公が体験する怖い出来事です。

第一話

今日から車で旅に出ることにした。

これはほんのさっき思い立ったことだ。

昼下がり。ぐうたらな午後のひと時。

大学はもう後期の試験も終わって一息ついた。

（バイトがあるけど毎日は行く必要のないものだしお金も貯めてる。

あの馬鹿面さげた、それでいて威張っている従業員のやつらに毎日顔を合わせるなんて

ぞっとするよ。まったく。

まだ後期の試験が残っているからっていう電話をいれて来週から行くって事にすりゃ

いいんだから。

どこへ行くなんて決めてないさ。早速準備をしよう。思い立ったが吉日って

言葉もあるくらいだし。）

そう考えるや彼は財布ひとつを引っつかみ、寒さしのぎの毛布を何枚かもって

車に乗り込んだ。

午後のいい天気。もう2月になった。たまらないくらいの春の日差しは

もうすぐ降り注いでくる。もしかして、この旅でそんな事にも出くわすかもしれない。

幸せな気分だな。ま、何にも出くわさなくてもいいじゃないか。

旅にはいろんな目的がある。無目的だって構やしない。

エンジンをかける。彼はその音を聞きながらしばらく下を向き黙っていたが

やがてはじけるように顔を上げて、よし、と言った。アクセルをゆっくりと踏み込む。

そしてカーステレオにCDを入れる。音楽が鳴り出した。

そして車を快調に走らせる。周りの景色は午後の日差しの中流れていく。

今日の天気にぴったりな軽やかな音楽だ。しばらく音楽を聴いていたが

この天気なら音楽はいらぬ。風の音でもいいかもしれないと思ったりもした。

とにかく。この道をひたすら進むのみだ。（どこでもいいから遠くへいってみよう）

いい風といい風景で楽しい気分になる。

しばらくして男はコンビニで食い物と飲み物を買うために駐車場に車を止めた。

（この冒険の旅ーま、単なるドライブだがーは先には何が待ち受けているかわからない。

だから一応、たくさん食べ物と飲み物を買っておくべきだ。より遠くに跳ぶためにはたくさん

の助走が必要なのと同じく、より遠くへ旅するにはたくさん食料と水が必要だ。

食料と水は遠くへ行くための助走だ。）などと考えながら鼻歌混じりにコンビニの中

へ入っていった。

第二話

（ああ、この気持ちはなんだろう）と彼女は思った。

ここは昼間さえ暗い琥珀色のカーテンを閉め切っている。

そのカーテンを通して暗い琥珀色が室内を満たしている。

その部屋はとても狭い。

ベッドがひとつ。それにテレビ。それからうず高く積まれ、あるいは雪崩を起こした古いビデオテープ群、ＤＶＤ、本が文字通り足の踏み場もない

状態に散らばっている。本は雑誌などではなく、神秘学や霊に関するオカルト本。

そしてプラトンやユングなどの本、マルキド＝サド、それから残酷絵と言われる

血の滴るような無残絵の写真集や画集などだ。

それらは散々にばら撒かれ、無造作に床に転がっている。

ＴＶが部屋を照らしているがその画面は砂嵐で、小さな唸り声をあげている。

彼女はベッドの横腹に背をもたれさせてそのテレビの砂嵐ー１４イ

ンチのダイヤル式の
テレビ一を見ていた。
カーテンの遮光が彼女の顔を透かしてみせる。
黒い髪を一気に８：２に分け、長いほうは首のところまで、短いほうは耳の下くらいまで
の髪の長さ。強情そうだが、形のいい唇。整った眉と鼻筋
その目は魅力的だがテレビの砂嵐を見ている目は何を考えているかわからない。
そして花柄のワンピースを着ている。
曲げた膝頭を両手でもち、その膝頭にあごを乗せてずっと砂嵐を見ていた。
おそらく二十歳を超えたくらいで何のメーキャップもしていない。
ワンピースを着ているのでもっと年下にも見える。
彼女はやがてふらりと立ち上がり、部屋を出て車庫へ行った。
女が去った後の部屋のベッドの上はナイフで切り刻まれ、真っ赤に血に染まった男が
死んでいる、いや、転がっていのが残されていた。

頬は刺され、穴をあけられ、歯はボキボキに折られ、唇は口の内側へ向かっていた。

目は黒い穴になっており、眼球はベッドの上のコップの中で理科室のホルマリン漬け

のように浮いていた。

その赤黒い顔をカーテン越しの暗い琥珀色が陰影を漬けて浮かび上がらせていた。

女は外に出ると車の中から服を取り出した。

無造作に花柄のワンピースを脱いだ。そしてこんどは黒い服に身を包んだ。

ワンピースは投げ捨て、車に乗り込みエンジンをかけて、街へ向かった。

ここは人里離れた、と形容するしかないくらいの一軒屋である。

街まで、そう、2時間。（どうせならコンビニにでも立ち寄って、それから・・・

とその女は決めた。

第三話

彼女はコンビニの駐車場に車を停めた。

すると一台の車から男が降りてコンビニに向かっているのが見えた。

今日最初に見る男ーそして若いー、彼女は目を凝らして見た。

一つ一つの動作は軽く、未来にたくさんの希望を持っているように見えた。

（・・・何、見せ付けているの？自分の幸福を？）と女はそう思った。

（きっと綺麗な女の恋人がいてとても仲が良いんだわ。きっとその女のことを

気にかけていてだんだんと仲が良くなったに違いないわ。たぶんこの男が

言い寄ったんだわ。そいつに。本当は欲情で一杯な癖してけれどそれを隠して

ニコニコしちゃって、そうよ、あの笑いだわ。あの笑いで女をたぶらかしたに違い

ないわ。本人はそんな気は絶対にない、愛してるって考えている筈。そうやって

自己弁護するんだから・・・この一週間で5回はベッドを共にしたわね。その女と。

そして自分は幸福だって見せ付けてるのよ。多分。ああいう一見普通の男は

変態がおおいから彼女とやるときはレイプまがいにやるんだわ。何？あの

くそ忌々しい車？それにあの服！冗談じゃないわ。私に無許可であんな服着ていいと

思っているの！？あんな似合わない服）彼女は車から降りながらそう思った。

そして男の車に近づきポケットから手を出してその手を車の後ろに置いた。

（あたしはあの人にあんな服着ちゃいけないっていったはずよ、そうよ、言ったわ。

この服を着なさいって服だって買ってあげた！買ってあげたはずよ！・・・・

そうだわ、きっとあの服はあのメス犬にもらったに違いないわ。憎たらしい。

よくもそんな服を私の目の前でぬけぬけとそんな服をためらいもなく着て

コンビニに入って見せ付けてるの見せ付けてるの見せ付けてるわ絶対に許さない

許さない許さない（）それから車をこぶしでドン、と叩いて、男が入って行った

コンビニへ向かった。

第四話

彼がコンビニにゆっくりと入って行ったあとしばらくして彼女は
コンビニへ入っていった。「いらっしゃいませ」と店員の男が言って
彼女をチラッと見た。（ひょぇ～、かわいい）と店員は思い、隣に
いる
もう一人のバイトを肘で突付いた。
しかし彼女はそんなことには全然気づかずに、何か買う振りをしな
がら
彼の行動に目を光らせた。

彼は思った。（さて、長い旅だ。え～と、財布は、財布はと・・・
あった。
しかし、無計画っていうのもなかなか良いものかもしれないな。
どこへ行くか、何をするかはここで買ったもんでも食べながら運転
中に決めよう、うん。

まぁ、目的もないからな）と彼はガイドブックのようなものも買っておこう

と思い、本のところへ歩いていった。

店の中には何人か客がいて彼は目もくれなかったけれど、偶々見た中に綺麗な

女性がいた。（うわ、これはすごい、綺麗だ）彼は彼女の目を見た。偶然視線が

行き逢った。けれど彼はそれに耐え切れず、すぐに目をそらした。

（綺麗過ぎるな、こりゃ。それに魅力的過ぎる。自分にはどうしようもないくらいにね。

関係ないさ、諦める）そういって黒い服のその女とすれ違った。

旅に出ようとしているときの何ものをも恐れないあの開放感はたった一人の綺麗すぎる

女の視線ですくんでしまった。途中で行きずりの恋なんてものもあるかも

などと旅に思いを馳せていたが、それも現実に引き戻された感じだった。

彼は本や食べ物、飲み物をレジに持っていき、会計がおわるとさっさと車に

乗り込んだ。荷物は後ろに置き、そのなかからパンとコーヒーを出して

エンジンをかける（まずはどこか景色のいいところで飯でも食おう。ま、遠回り

にはなるけれど山道を通るかな。高速とかは使うまい。お金もかかるし。

この車は燃費いいしガソリンも満タンだし、途中で止まるなんて事はないさ）

空はとても蒼い。彼は窓を開けて風のそよぎを楽しみながらドライブすることに決めた。

排気ガスだらけの高速なんかより綺麗な空気の山道でしょ、と思いながら。

第五話

彼女はじっと彼を観察していた。コンビニですれ違うときに良く見ると意外にいい男であること

がわかった。

（私の思い違いだったかもしれないわね。彼、純情そうな顔をしていたもの。

って言うことは、今付き合っている女っていうのは無理に頼まれて付き合っている

だけなんだわ。本当に好きなのは私のことなのね。あれだけ食べ物を買い込んでいた

ってことはきっと彼女から逃れるため。家に帰らないためだわ。あの時、目を逸らして

いたのはきっと私に全てを見抜かれてしまうのが怖かったから。いいえ、そうじゃない

わね。思い出すと『僕を救ってほしい』って目が語っていたわ。

そう、彼を本当に愛する人が必要だわ。きっとあの人には。今日、私が家を出る前に

妙な気持ちになっていたのは彼のせいだわ。彼のせいだわ彼のせいだわ。）

彼女はそう考えながら、何も買わずにコンビニを出た。
そして車に乗り込んだ。座ったまま前をじっと見ながら考える。
（でも目を逸らすって言うことは何かやましい事があるんだわ。今度はまた別の
女の所へ行くつもりかしら。あの食べ物はそこで二人で食べるためね。そうに
決まってるわ。私を差し置いて！ずっとずっと愛してきて、ついにこの世で
巡りあったっていうのに！前世からの約束だったのに！そうよ、絶対に。
なんて事！何とかしないと・・・愛が壊れちゃうわ）
彼女はそう思いながら後部座席からレーダーを出した。小型ではあるが
発信機をつけたものを何十キロも追う装置である。
発信機はポケットの中から取り出して、さっき彼の車の後ろにつけていた。
（私はつけるつもりはなかった。そうよ、これは無意識のうちにつけていた。

多分あの時点で私にはわかっていたんだわ。彼がほかの女のところへいくということが

。こうなることはもうわかっていたのよ。私はみんな、見抜いていた。

前の男だってそう。私に迫ってきたときに別の女のことを考えていた。それも

明日のデートのことを考えていた。だから殺しただから殺しただから殺したそれだけ

私は悪くない悪いのは別のことを考えていた男みな土壇場で私を裏切るわでも私には

分かっていたあの男が土壇場で裏切るということはだから前もって用意した前もって

用意したのよナイフを用意したわたしを・・・）彼女は一点を見つめそう呟き続けた。

それからしばらくして我に帰った。（そう。あの男がバーで私に話しかけたときから

分かっていた。でももう良いわ。カタはついたんだから。今回の彼は私のことを

本当に愛してくれるわ。そして私がそれを受け入れるのも。でも残念だわ。

その後私のことを裏切るって事がわかってるんですもの。無意識のうちに

わかってしまうなんてなんてことかしら。でもこれは運命なのよ、私は何も行動は

起こさないわ。一切は運命なんだもの。そして今から私が彼を追いかけるのも

運命なのよ―）そうして彼女はレーダーの地図上を走る白い光を追うために

車のエンジンをかけた。

第六話

高速に乗らない山道は車の通りも少なく、また春の香りさえしてきた。

だいぶ太陽は傾きつつあり、午後は終わりつつある。全てが広く彼を包み、

やっと何かから逃れつつある気分になった。家にいたならこの午後に退屈して

心が崩れてどうしようもない気持ちを整理さえできないまま妙に悲しい気分になっていただろ

う。してみるとこの選択はこの一事だけで正解だなと彼は思った。

（しばらくは山道だ。その後もとの一直線な道になる。ちょっとここで食事でもしよう）

彼は車を寄せることが出来る場所を見つけて脇に寄せた。

車の窓を開けてガードレールの下を見る。さぁっと川が流れ白いしぶきや川付近でしか

感じることができない空気があった。涼しげで岩にぶつかる水しぶきは小さな虹をつくり

彼の目を楽しませた。そしてそれを飾るたくさんの木々。それら全てが相まって川の香り

さえ漂ってきだした。それが午後の無限感と相伴い不思議な気持ちに彼を導いた。

この時期にしてはうららかすぎるほどの沈みかけた陽射し、そして川の音。

川岸のぬれていない岩と、川の中の岩の鮮やかな色のコントラスト。それらを照らす陽射し。彼はしばし何も考えない心地よい気分に浸っていた。

（あ〜あ、もし俺に彼女とかいたら最高なんだけどな。ま、しょうがないか。彼女がいたら多分こんなところには来ていないか。退屈だとか何とか言われるからなぁ。

けど、今日コンビニで見たあの女、今何してんだろ。はぁ、堪らんなぁ、世の中って）

彼は車のドアに肘をかけてじっと眺めていた。

ＦＭからは高速道路は一杯で進めないというニュースが流れていた。

（見ろ、こっちのほうが正解じゃないか）「ピンポーン、正解です」と彼は独り言を

言い、そんな独り言を言った自分に思わず笑った。

そして食事を始めた。こうやって食べるってのもなかなか美味いもんだ。ただ、ずっと

運転しっぱなしで疲れを感じて、食べ終わった後車から降りて川の近くまで降りて

軽く運動をした。缶ジュースを飲みながら川をしばらく見た後、空き缶を川に投げようとした。

（おっと、誰も見てないなんて言い訳は無いぜ。俺の良心が見てるだからこれはごみ袋に

入れておこう）と考えて彼は車の中に戻って缶をゴミ袋に入れようとする。

「旅は何もかもやっていいなんていうのは理由にならない。最低限のルールは守らなくちゃね

、わかったね。良い子のみんな。それじゃ、シーユー」

とまるでテレビの前のみんなに言うように呟いて袋に入れた。

そして彼はエンジンを再びかけ、車をスタートさせた。

ＦＭは先ほど４時の時刻を告げた。「ははーん、４時か。じゃ小休憩を入れながら今日は

走ろう。９時くらいまで走るかな」彼はアクセルを踏み込み、加速させた。

口笛を吹きながら。

彼が車の外に出てぼうっとしている間、何台かの車が通り過ぎた。
彼は当然そんな車には

全くの無関心だった。けれど、そうやって通り過ぎていく車の中には、彼女の車も含まれていた。

第七話

彼女は彼の車の横を通り過ぎるとき、速度を落としながら彼の後姿を見た。

（先回りさせるって事はこの男、私に会って話をしたいって事ね。何しろ純真なんだから。

そう、幼稚園のころから彼はずっとそうだったわ。みんなが遊んでいるとき一人で絵なんか

描いていた。それから私が隣にいてもチラッと見るだけで決して自分から話しかけて

こなかった。そう、私が話しかけてからやっと『この絵は僕ら二人の結婚式の絵だよ』

って言って真っ赤になってたわ。まるで今起こったかのように覚えてるわ。

私が引っ越すとき『また会える？』って彼は聞いたわ。『きっと会えるわ。あたし

待ってるから』って言ったわ。今、その約束の時が来たわ。私は必ず約束は果たすつもり。

どんなことをしてもね。彼はそういえばこう言ったっけ。『うん。じゃあ僕、君に必ず

会いにいくから。その時には話しかけてよね。』って言ってたわ。

ーああ、なんて素敵なのかしら。ようやく会えるのね。今は彼は大学時代の特許で

一財産を作って、それで暮らしている、って聞いたわ。今もそう。アイデアに詰まって

それで頭の疲れを癒しにくるのよ。彼は・・・・。そう呟きながら彼の車を追い抜いた。

その頃、彼女の家周辺はとても騒がしくなっていた。何台かのパトカー、救急車、

それから新聞記者が集まっていた。悲惨な死体が外に運び出されている最中だった。

（これはひどいな。最悪だ。反吐もでねぇくらいだぜ）と警部は言った。

（今まで何人もの犯罪者を見てきたがこれは最悪の部類に入るな）

警部は再びその家へ入った。

第八話

その家の中にはいたるところに警官がいた。白い粉をまいたり、指紋を検出したりと忙しい

様子だった。「あ、警部。チョッと来て下さい」と彼の部下である刑事が声をかけた。

警部はうっ、と思った。たまらなく気が滅入ってきた。「おい、その部屋に入らなきゃ

いかんのか？」「当たり前ですよ。もう大丈夫です。指も、腕も、足もみんな部屋の外へ

出しました。この部屋には血がたくさんあるだけです」

「血があるだけって一一体何を言ってるんだ？」「いや、まぁ・・・あと、ビデオの検証を

しないといけませんね。いまどきビデオテープっていうのも珍しいですが・・・もしかしたら

警部の好きなやらしいビデオもあるかもしれませんよ」「つまらない事を言うな一しかし

これだけの凶悪な人殺しなんてそうそうできるものでもないだろう。言葉を失うな。

俺はこの道に入って結構な数の殺人現場を見てきたけれど、こう胸

から、うっとくるような

感じはそうそう無かった。これは並みの事件じゃないはずだ。普通一刺して、それで息が

絶えりゃ怖くなってもうそれ以上死体に近づくなんて事はしなくなる。普通はな。だけど

こいつのやり方を見てみろよ。特に傷口だ。切り方だ。すぱっととても上手に切っていやがる。

傷口がこう、すぱっとな。死体に対して平常心を保っていられる人間の証拠だよ。これは。

この家の家主の名前とか身元はわかったのか？」「ええ。すぐわかりました」

「どんな男だ？前科は？」「いえ一それが女なんですよ」「女？」

「ええ、女です」

「何てことだ。本当か？」「はい。念のために何度か確認をしました。自分もとても

信じることが出来なかったものですから一」と刑事は言った。

「名前は・・・です。二十歳で親はいませんね。私生児のようです。国籍は日本。

精神病院の入退院を繰り返しています」「どういうことだ。」「まだ良くはわからないのです

が。なぜ入院したのかは詳しい部分は」「ほう。いい仕事をしているな。―ところで

彼女の精神病院っていうのはどこなんだ？」警部は何かしらこの事件に興味を持った。

この事件は最後の最後までやって俺が解決してみせる。もうそろそろデスクにまわされて

現場の仕事じゃなくなる―俺も情けなくなったものだ。今までの活躍をもってしても

この決まりは曲げられなかった。仕方がないさ。この事件を最後の最後までやり抜いて

一花さかせてから、このけったくそ悪い部下の刑事に俺の椅子をやろう、と思った。

彼は精神病院の名前と場所を聞いたあと、すぐ外へ出ようとした。

「警部、どこへ？」と刑事が尋ねた。なんだ、こいつは？わからんのか？

「てめぇは俺が今何を尋ねたのかも覚えてねぇのか？」そう言ってその部屋を出た。

外に出る。人里離れたこの場所は凄まじいばかりの夕暮れが降りかかり遠くでは黒雲が

近づいてきていた。（一雨来るな、これは）と警部は思った。一雨でも二雨でもくればいい。

こんな事件の中にいるときは雨が降ってるほうが似合ってるんだからな。

第九話

彼ー名前は伊吹と言うーはコンビニで買い物をして、車の運転を続けた。だんだんと雲行きが

怪しくなって来たのを見て驚くよりも喜んだ。

やはり一日中運転を続けて同じような天気が続くと言うのは辛い。雨が降ってくれれば

ちょっとは気分転換になる。むしろ雨が激しくなって雷が鳴るくらいの土砂降りになって

くれれば最高に心浮き立つのにな、と思った。雨の音を聞きながら今日の夜はコンビニで買っ

たウィスキーを飲むのも悪くは無い。もちろんＢＧＭはＦＭのお洒落なジャズなら最高だ。

街の灯りが、激しく降る雨で散らばっているのを見ながらウィスキーをすする。

男の黄昏。琥珀色の時間。何よりも自分に会える時間だーなんて言ってみちゃったりしてね。

伊吹は「うひょ～、俺って恥ずかしい奴だぜぇ！」とバンバンとハンドルを叩いた。

そんな恥ずかしいことを考える自分に腹の底から喜びがこみ上げて

きて、普通の状態を保って
いられなくなった。
（そうと決まれば先に進めば駐車場だってあるだろう。もしかしたら無いかもしれない。
その場合は車をどっか道の脇にとめればいいか。それから車内灯をつけて食事をするか。
雨が入らない程度に窓を開けて、雨音を聞きながら。そういや漫画も車の中にあったな。
それを読んだりもしてみるか。）
彼は峠を出て、もはや一本道の一直線の道路を走る。
あと何十キロか走ったらどこかお店もあるだろう。雨はガラスにパチパチと音を立てて
あたる。まだワイパーをかけるほどには降っていない。景色は次々と彼に追い抜かれ
後ろに流れていった。見ると周りは荒野だった。黒い影で浮きぼられた荒野。
（これが歩きだったら気が滅入るだろうな。こんな景色をずっと見て歩き続けなきゃいけない
んだから。速度が速いとこの景色が心に焼きつく前に通りすぎるこ

とが出来る。

速度と印象って関係があるようだ）などとつまらぬ事を考えた。

速さは薄さで、遅さは濃さ。確かにそうだ。印象を強く覚えるには時間をかけなければ

ならない。でもどんなに早く通り過ぎても興味を持ったものがあればそれは印象に残る。

む、自分がこうやってドライブに出たのはもしかしてそういうものを見たいからか？

家にいて何もしないでいると、生きることに絶望しそうになってしまう。それは耐え難く

重苦しく自分に接近してくる。生きることのむなしさを痛感してしまう。

それから逃れるために何かしないといけない。む、しかし、普段はこんな気持ちにはならない

のになんでこんなこと考えてるんだ？このわびしい風景のせいかもしれない。あるいは

俺自身のせいかもしれない。外側から侵食してくるのか。それとも俺の心の中から湧き出す

のか。そんなことは判らないな。

ドライブしてよかった。こんなことを考える自分に出会えるなんて。
自分に会うために

出発したのかもしれないな、と伊吹は思った。

何もやっていないと不安でたまらなくなるのだ。人はみなそうだと思う。

ああ、俺は何を考えているんだろう？雨が激しくなってきた。速度をあげると雨は激しく

窓ガラスを叩く。彼は車を飛ばし続けた。近くには憂愁がある。遠くにいけば自分が

あるだろう。それを求めて、車を飛ばし続けよう。

第十話

灯りが雨の降る向こう側にぼんやりと見える。「はぁ～、ついにたどり着いたぜ」

一応の休憩所だ。「ずっと運転してたからなぁ。中に入ったらお酒でも飲むか。あとは食い物を買おう。ともかく腹を満たして、心も満たされよう。」伊吹はそう考えた。

駐車場に車を停める。すでに４台ほど車が止まっていた。駐車場はかなり広いにもかかわらず車の数はやけに少ない。それも当然でわざわざこっちの道を通って車を走らせる人間は少ない。高速のほうを通ったほうがどこへ行くにも早いし、近道なのだ。おそらくこの道を通る人間はよっぽどの変わり者か物好きである。伊吹は自分のことを変わり者だとは思ったことはない。ただ、自分のとっている、自分にとっては当然だと思う行動が他の人からは変に見えると言うことはしばしばあった。それが変わり者と言うことなのだろうか。人それぞれにそれぞれ

の行動をとる理由があるのだ。その理由を知らずに変わり者扱いされても困る。とても耐えら
れない。要するに彼は自分は変わっているとは思えないのである。
ただ理解されないというの
は悲しいことではあったが。誤解は常に受けてきた。そしてその誤
解を基に人は俺を評価し、
どういう人間か判断する。判断する土台が間違いなのに俺を評価す
るのはおかしい。
物の考え方が違うというのは当然のことだ。人はそれぞれ異なる人
生を生きているし異なるも
のを愛しているのだから。なのに自分が正しいとして自分を基準と
して他人を見てとやかく言
うというわけだ。世界はそんなに画一的なものではないのだ。
（まぁいいや）伊吹は車を降りて、店に走っていった。ものすごい
雨でうかうかしていたらび
しょぬれになることような強烈な雨だった。走りながら店の明かり
に照らされた雨粒が見え
た。ちょっと上を見ると次々と降ってくるそれらの粒々は空間と言
う空間に満たされて何も無
い晴れよりもエキサイティングな気がした。水溜りを踏まぬように

気をつけながら彼は店へ向

かった。バーの明かりはやっと彼に一息つかせてくれるオアシスの

目印だった。たぶんお客さ

んなんてかなりすくないだろう。誰にも邪魔されずゆっくり飲める。

それを想像すると楽しく

て楽しくて仕方が無い

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8821f/

ドライブ

2010年10月22日02時29分発行